

審査員賞

高校生部門

東京都町田市

私立和光学園和光高等学校2年

神保 萌

そばにいるといらうこと

祖母を亡くしたのは、小学校五年生の頃だ。家族の死ははじめてだった。悲しみはしばらくなかった。夕食のときにぽつりと残る空席。それを見ては、なくしものをしたような日常をふらふらと漂った。

祖母は短歌を残していた。遺品整理をしているとき、祖父がそれを見せてくれた。糸で束ねられた和紙の手帳は皺だらけだった。私は思わず手元に引きよせて必死に読んだ。自分の名前が短歌のなかにたくさんちりばめられていることに気がついたからだ。家でのと、畑仕事へ行つたときのこと。私の言動がフィルムに収められたように生き生きと記されていた。いつもしとやかで言葉少なな祖母が私をこんなにも気にかけているなんて知らなかった。いつでも見守ってくれていたのだ。

「萌ちゃんと呼べば視線を合はす子とあと幾年をともに過ぐすや」

この歌が忘れられない。昔、庭の草むしりや玄関掃除を嫌がって祖母と大喧嘩をしたことがあった。いま思えば、限られた時間のなかで将来身につけておくべき生活の知恵を手伝いを通して伝えたかったのかもしれない。私と同年代の友人と同じような話題をみつけられない祖母はそうすることでしか私とコミュニケーションをとれなかったのだ。

最後に祖母と会ったのは、病院の白い部屋だった。なんと言葉をかければよいのかとおろおろする私に祖母は体重をきくと、私、負けてしまったわ、と弱々しく笑った。

もっとたくさん話せばよかった。もっとたくさん手伝いをして、助けになってやるんだ。仏壇に手を合わせて、いつも思う。

「あたりまえ」は突然なくなる。毎日話をして、笑いあう。それがどんなに幸せなことか私は知った。家族だからこそ気恥ずかしさもあるかもしれない。だが、一番最後まで心をつないでくれるのは、その人との間にある言葉だ。みんなといられる時間を大切にしたい。私は生きていきたい。